


これがわたしの日那さま

目次

愛妾 <small>あいしやう</small> への道のり	7
国王であるということ	88
愛妾 <small>あいしやう</small> 生活前途多難	174
ケヴィンが見た新しい始まり	261
“愛妾 <small>あいしやう</small> ”への道、未だ遠し	314



登場人物 紹介



エイドリアン ▲

シュエラの幼馴染で、初恋の人。
国王を守る近衛隊士の一人。

▲ フィーナ&カチュア ▲

シュエラ付きの侍女。はじめは
シュエラに反発していたが……

ケヴィン ▲

シグルドの従兄で、第一の側近。
シュエラの実質的な後見人。

ヘリオット ▲

シグルドの近衛隊時代の仲間
第二の側近。一見お調子だが……



シグルド ▲

23歳。ラウシュリッツ王国国王。
異母兄が亡くなったため突然国王に。
国王としてのプレッシャーに
日々苦しんでいる。

シュエラ ▲

18歳。貧乏伯爵家の長女。
国王の側近であるケヴィンに誘われ
愛妾候補として王城に上がることに。

愛妾への道のり

1 これがわたしの旦那さま

ここから、わたしの新しい人生が始まる――

――ラウシュリッツ王国王城。

「クリフォード公爵トマス殿」

名前を呼ばれ、壮年の男性が歩き出す。シュエラはそのあとに続いて、謁見の間に足を踏み入れた。玉座までまっすぐ敷かれた絨毯の赤さが、緊張がちがちになったシュエラの胸の鼓動を煽る。しどやかにしずしずと、あごを引いてうつむき加減に、視線は足元から七、八歩先の床へ。公爵に追いつけないからといって、決して大股に歩いたり小走りになったりしてはいけない。

心の中でぶつぶつとつぶやきながら、公爵の足が視界から消えそうになる度にその焦りを呑み込む。先に玉座の前にたどりついた公爵は、少し振り返ってシユエラの到着を待っていた。シユエラが斜め後ろで立ち止まると、公爵は前を向いてひざまずく。それに合わせてシユエラも、新緑色のドレスのスカートをつまんで最上級の札を取った。

「謁見の榮譽をいただき恐悦至極に存じます。国王陛下におかれましては……」

美辞麗句を並べ立てる公爵の声が耳に入っていない。際限なく高まる緊張、慣れない姿勢。シユエラの神経は今にも焼き切れそうだった。

「こちらに参らせました女性は、ハーネット伯爵令嬢シユエラと申します」

この言葉にはつと我に返り、シユエラは一層腰を低くした。

ふわりとふくらんだドレスの中の足は、無理な体勢にふるふる震えている。片足を後ろに下げ、膝を床に限りなく近づけるけれど、決して床につけてはいけない。声をかけられるまでこの姿勢でいなくちゃならないなんて、拷問に等しい。

「シユエラの母はシユエラを筆頭に十四人もの子どもを産んだ女性で、シユエラも母に似て健康的な体つきをしております」

公爵の堂々とした口上に、シユエラは頬を赤らめた。

ここは公の場で、いるのは国王陛下だけじゃない。絨毯の両脇にはたくさんの男の人たちが並んでいる。こんな場所で女性の体のことを話すなんてマナー違反だ。

胸や腰に視線が集まるのを感じて、顔から火を噴く思いだった。

……けれどわかっている。シユエラにはそれくらいしかとりえがない。

貴族たちが遠慮なくシユエラを眺める中、頭上からあきれたような声が降ってきた。

「そんなに産める必要はないだろう」

このような言葉が返ってくるとは思わなかったようで、クリフォード公爵はしどろもどろになる。

「えー、それだけではございませんでして、シユエラの兄弟はシユエラを除いてみな男なのでございます。まことに見事な男系の血筋といえましょう。多産で男系しかも健康、お世継ぎをもうけるにはこれ以上ない女性かと存じます」

おお……、と誰かがつぶやく声をきっかけに、ささやきがあちこちから聞こえてくる。謁見の間全体がざわざわと波立っているようだ。声は小さく、大勢が話しているので聞き取れない。何か嫌なことを言われているのではないかと気になって落ち着かなくなってくる。

そろそろ足も限界だ。早くこの謁見が終わってほしいと心から願う。

願いが聞き届けられたのか、玉座の方から直接声をかけられた。

「娘、面を上げよ」

忘れかけていた緊張が再び走った。シユエラはがさつに見えないようにゆっくりと体を起こし、数段ある階段の先を見上げた。

背もたれの高い、赤と金の玉座。肘掛けに頬杖をついて、やる気なさげにシユエラを見下ろす青年がそこに座っていた。

金糸と銀糸で刺繍された青紫色の衣装、動物の毛を縁にあしらったマント。頭に載せられた細く

輝く輪。金色がかつた茶色の髪に群青色の目の、精悍な顔つきをした若き王。姿勢をそのままに王は目を細め、鋭い視線をシュエラに向ける。

ラウシュリッツ王国第十二代国王シグルド。

この方がわたしの旦那さまになる——

国王ににらみつけられながらも、シュエラはぼんやりとそんなことを思っていた。

2 新生活スタートにおけるあれやこれや

シュエラの父であるハーネット伯爵は、ラウシュリッツ王国の東部中央に所領を持つ。

王国内で末席とはいえ上級貴族として目される身分であるため、所領はそこそこ広く、それなりの税収があった。

しかし上級貴族としての体面を保てる程度に裕福だった暮らしは、突然終わりを告げる。

五年前、隣国への軍の派遣に反対したかどで父は官職を罷免され、それによって得ていた収入を失った。また、管理を任せていた者たちの裏切りによって、所領はろくに手入れもされずに荒れ果

てており、領民の暮らしは不当な税の徴収によって困窮を極めていた。

王都にあった邸を引き払い、逃げるように所領に移り住むこととなった一家は、その復興のために切り詰めた生活を送ることとなる。

裏切り者たちが着服した金品を持って行方をくらましたため、父伯爵は王都から持ってきた財産を所領の整備に投じることにした。所領の邸に残っていた金目のものも売り払い、使用人に暇を出して、庶民と変わらない生活を始めた。

伯爵夫妻と子ども十四人、給金はいらなからと言って残った執事と乳母で、家族は総勢十八人。所領からあがってくる収入はほとんど所領の管理と整備に投じ、一家の暮らしのために取っておくのはほんのわずか。母と乳母とシュエラは裁縫で内職をし、弟たちも手紙の代筆や商家の子どもの家庭教師などで稼いでいたが、すすく育つ少年たちの食費は日に日にかさんで家計を圧迫していた。内職するより身分を隠して働きに出た方がお金になるんじゃないだろうかと思いついた。この話は舞い込んだ。

『陛下には愛妾が必要です』

その言葉を聞いて、シュエラは実家への援助を条件に、国王の愛妾として王城に上がることを決意した。

西館に部屋を賜り、謁見の間からの退室を命ぜられた。

クリフォード公爵に続いて謁見の間を出たシュエラは、こっそりと細長いため息をつく。

王城に入ったのも初めてならば、国王陛下にお目通りしたのも初めてだ。無事に謁見が済んで、ほっとするあまり体の芯から力が抜けそうになる。でもこんなところでへたり込むわけにはいかない。ぐっと足に力を入れて前に進む。

謁見の間がある本館から西館への連絡通路に差し掛かったところで、背後からせわしない足音が聞こえてきた。

「シュエラ！」

聞き覚えのある声に、シュエラはぱっと振り返る。

遠くから声をかけてきた男性は、急ぎ足であつという間に側まで来た。

「エド兄さま」

薄い金髪に澄み渡った青い瞳を持つ優しげな顔立ちをした青年は、シュエラの隣に立つクリフォード公爵に腰を折って頭を下げる。

「お久しぶりにございます」

「おお、エイドリアン。元気にしておったか？」

「はい。おかげをもちまして。……あの、申し訳ありませんが、シュエラ嬢と少し話をさせていだいてよろしいでしょうか？」

少し顔を上げたエイドリアンは遠慮がちに申し出る。あごにひげをたくわえたクリフォード公爵は、そのひげをなでつけながらにこにここと笑った。

「構わんよ。そういえばそなたらは幼なじみだと言っておったな」

「はい。では少々失礼いたしました……」

エイドリアンは目配せでシュエラを促し、連絡通路から脇に外れる。シュエラはそれについていった。

エイドリアンとは幼い頃に家同士の交流があり、上に兄姉きょうだいのいないシュエラにとって頼れる兄のような存在だった。

しかし五年前の父の失脚によって両家の交流は途絶えた。国が隣国の戦乱から手を引いて三年たつが、戦争が終わってからも顔を合わせることはなかった。

シュエラが今十八歳だから、エイドリアンは今年二十七歳になる。彼は最後に顔を合わせた五年前より少し顔がやせて、ぐっと大人っぽくなっていた。

シュエラの一家が所領に移り住んだ後に、再び戦場に赴おもむいたと友人からの手紙で知らされていたので、戦場から兵が引き揚げてくるまでの二年間、ずっと心配だった。

その後の手紙で無事戻ったことも知っていたけど、こうして再会できた今、改めてうれしさがこみあげる。シュエラの心は弾み、顔が自然にほころんできた。

エイドリアンは連絡通路のすぐ側にあつた生け垣に寄ると、振り返る。

その表情は厳しかった。

「どうしてここに来たりなんかしたんだ」

怒ったような低い声と責める瞳に、シュエラの笑顔は消える。

王城に上がることをシユエラは事前に知らせていなかった。手紙を出すにもお金がかかるし、どうせ会えるなら必要ないと思ったからだ。

「愛妾あいしやうになるというのがどういうことなのか、わかっているのか？」

エイドリアンの言いたいことはすぐにわかった。

ここラウシュリッツ王国では、一人の男性には一人の女性しか嫁げないと定められている。二人目の妻を持つことは許されず、愛人という存在もまた嫌われ、蔑さげすまれていた。

そんな中、国王だけは血統の存続のために、正式な妻の他にも女性を側に置くことを慣例として認められている。それが愛妾だ。

しかし慣例として認められているとはいえ、愛妾は愛人と同じ。存在は認められても、悪印象だけはぬぐえない。人々から軽蔑されて、日陰者のように見られる。

そして愛妾は夫たる国王と正式な婚姻を結べない。何故ならすでに王妃という妻が存在するからだ。エイドリアンの心配はもつともだ。けれど五年ぶりなのだから、少しくらい再会を喜んでくれてもいいと思う。

シユエラはそっぽを向き、口をとがらせた。

「わかっているわ。わたしもう、十三歳の子どものじゃないのよ？」

「だったら何故？」

目を吊り上げて怒るエイドリアンに、シユエラはふてくされて言った。

「だって、家にいたってお嫁に行けそうになかったんだもの」

貴族の娘ならば十八にもなればとくに嫁入り先が決まっているものだ。けれどシユエラには一切そういう話がなかった。父が失脚し家が貧乏になったため、持参金を出すことができないからだ。それに失脚した家と縁続きになりたくないのか、身分を望む商人や後添えを欲しがっている貴族からの縁談話も舞い込まない。そういう事情だから、今後も縁談が舞い込んでくる可能性は低い。結婚するアテがなく、このまま実家で暮らすくらいなら、日陰の身と言われても愛妾になって実家を出た方がいいんじゃないかと思ったのだ。……話を持ってきた人が父の失脚のことを知らないわけではないと思うので、シユエラが愛妾になることに問題はないだろう。シユエラの家の窮状きゆうじやうを思い出したのだろう。全身から発していた憤りいきどおを、エイドリアンは呑み下すように引つ込める。

後悔と心配が入り混じった表情をしたエイドリアンを励ますように、シユエラは明るく笑った。

「大丈夫だってば。考えてもみてよ。国王陛下が旦那さまになるのよ？ すごいじゃない」

「シユエラ……」

エイドリアンは額を手で覆い、うなだれる。あきれすぎて言葉が見つからないのだろう。冗談のつもりだったけれど、余計心配をかけてしまったようだ。

シユエラは肩をすくめる。

「それに、ここに来ればエド兄さまに会えるんじゃないかと思ったの」

顔を上げたエイドリアンに、シユエラは目を細めてほほえんだ。

戦場での功績を評価されたエイドリアンは、近衛隊このゑたいに入隊することとなり、国王の側で警護にあ

たっていると聞いていた。

青色のジャケットに銀糸の縁取りがされた近衛隊の制服がよく似合う。再会を期待していたが、こんなに早く叶うなんて。

「戦場から無事に帰ってきてくれてよかった。……久しぶりに会えてうれしかったわ、エド兄さま」
これ以上公爵を待たせるわけにはいかない。シュエラは言葉を失ったままのエイドリアンを置いて、連絡通路へと戻った。

案内された部屋は、修繕を繰り返しながらだましましたし使っているシュエラの邸とは、比べ物にならないくらい豪華だった。

王城なのだからシュエラの家より豪華で当たり前だけど、ここまで差があると「素敵な部屋がもたえてうれしい」という気持ちより、「こんなすごい部屋を使わせてもらっていいの……？」という気持ちが先に立つ。

色味の違う細かい板をいくつも組み合わせで幾何学模様を描いた床。同じような模様が彫り込まれたテーブルと椅子。部屋の隅には、見るからにやわらかそうなソファが置かれている。

奥にある扉の隙間からちらっと見たところ、この部屋は応接室としてのみ使われるらしく、向こうには寝室だけでなく衣裳部屋まで別についているようだった。部屋一つの大きさは実家でシュエラが使っていた部屋とそんなに変わらないけれど、実家では就寝から着替えまで一部屋で済んでいたものが三部屋にも増やされて戸惑ってしまう。しかも衣裳部屋には、クリフォード公爵家が用意

してくれたドレスが次々と運び込まれている。

シュエラは椅子に座ってお茶を飲みながら、その様子を居心地悪く眺めていた。

ここまでしてもらっていいのかしら？

ティーセットが載ったワゴンの上には、砂糖にレモンにミルク、蜂蜜がふんだんに用意され、テーブルの上には一人ではどうい食べきれない量の焼き菓子が並べられている。

なのに、お茶の席に座るのはシュエラ一人。

おかわりを聞かれて断ると、紺のワンピースにエプロンをつけた侍女はテーブルの上を片付けてワゴンを下げる。つましい食生活をしていたシュエラは、「残したお菓子はどうなるのかしら？」と思い、うっかり物欲しそうな目で見送ってしまった。

夕食時も、数種類のパンが詰められた大きなかごが、テーブルの中央にどっかりと置かれる。

こんなにたくさん……二人でも食べきれないわ。

椅子に座ってぼかんとしていたシュエラは、はっと我に振り返りに立つ侍女に言った。

「も、もう十分よ」

声をかけられて、シュエラの前に置かれた皿にサラダを盛りつけていた侍女は手を止める。

皿には新鮮な野菜が山のように盛られていた。

サラダがこぼれないように慎重に盛りつけていた侍女は、取り分けに使っていたトングを木のボウルの中に置き、両手で持ち直してワゴンへと運ぶ。ちらっと見えたボウルの中には、まだサラダ

がたくさん残っていた。

陛下はたくさん召し上がる方なのかしら？

しかしテーブルの上には、一人分の食器しか用意されていない。

「あの、陛下は……」

ボウルをワゴンに置いて侍女の列に戻ろうとする少女に、シユエラは声をかける。彼女は聞こえなかったかのように、列の端に並んで他の侍女と同じようにつんとすまして立った。

どうしたらいいのかしら……？

シユエラは目だけをちらつとワゴンに向ける。

二つのワゴンにぎゅうぎゅうに置かれたいくつもの容器。キルトの覆いが被せられているから中にどれだけ入っているかわからないけど、パンやサラダの量から考えてもほんの少しということはないだろう。

どう考えても一人分の量じゃない。けれど席はシユエラの分しか用意されていない。

悩んでいると、侍女の一人が口を開いた。

「どうぞお召し上がりください」

つつけんどんに言われ、夕食も一人なのだど納得して、シユエラは黙々と食べ始めた。

サラダの次にじゃがいものポタージュスープ、子羊のグリル、チーズが順々に供される。

実家では保存用のパンと、具がごろごろしたスープとチーズだけ。それも自分たちで用意するから、みんなの分をまとめて食卓に並べる。弟たちの世話をしながら食べていると、スープが残り半

分になった時にはすっかり冷めてしまっているということも少なくなかった。

ここでは手間暇かけて作られただろう上等な食事を、食べる順番に保温器から出してもらえる。

パンも焼き立てなのか、ほのかに温かく柔らかい。

美味しいものを温かなうちに食べられるしあわせ。

家族にも食べさせてあげたいとしみじみ思う。

二つの思いがこみ上げてきて涙ぐみそうになったシユエラに、斜め向かいに並んでいる侍女たちが変なものを見るような目を向けてきた。

ここまで豪華ではないにしろ、王都に住んでいた十三歳まではシユエラの家のご飯はこんな感じだったと思う。だからそれに感動するシユエラの方がおかしいことは、一応自覚している。

侍女はこの場に五人いるけれど、その誰にも話しかけられそうになかった。皿の上げ下げやおかわりなど、自分たちに必要な事柄は聞いてくるのに、声をかけたくてシユエラが視線を合わせようとしても、ふいと目をそらしてしまう。

そこはかかない悪意を感じる。

仕方のないことかもしれない。特に女性の目には、愛妾は不快な存在に映るのだろう。

途中から話しかけることをあきらめて、シユエラは懸命に食事を口に運んだ。

残したらもったいない。

だけで食べすぎて息が苦しくなってきたところで、シユエラはどうとうあきらめた。デザートを断り、体を反らせてお腹の苦しさをまぎらわせるシユエラに、侍女の一人が眉をひそめる。

「わたくし、こんなに食べられないの。次の食事からはもつと少なくてもらえるかしら？」
侍女たちを見回しながら言ったけれど誰も視線を合わせてくれなかつたので、シュエラの言葉を
受け取ってくれたかどうかさっぱりわからなかつた。

テーブルから食事が片付けられると、侍女のうち二人はワゴンを押して出ていき、もう二人は寝
室に入っていた。

残った一人と会話ができないことに気話まりを覚えながら、これから何をやるのだろうかとうと椅子に
座ってじっと待っていると、しばらくして出ていった侍女たちが大きな台車を引いて戻ってきた。

木でできたバスタブが載ったその台車を寝室に運び込み、それから大きな瓶の載ったワゴンを運
びこんで、少ししたら廊下へ戻し、次のワゴンを寝室に運ぶ。ワゴンが運び込まれることに聞こえ
てくる盛大な水音。侍女たちが次々と廊下からワゴンを運び入れることができるのは、他の誰かが
部屋の入り口までワゴンを運ぶのを手伝っているからだろう。

そのようにしばらくばたばたとしていたが、ワゴンの行き来がなくなり静まり返つたかと思うと、
寝室から出てきた侍女がつんとした様子でシュエラに告げた。

「ご入浴の支度が整いました」

バスタブが運び込まれたところでわかつていたけれど、改めて言われてシュエラの胸はどきんと
大きく打つ。

水も、水を沸かすための薪も貴重だから、入浴なんて滅多にできるものじゃない。普段は水で手

足を洗うのみ。よくて水やお湯で絞った布を使い、体をふくくらい。

だけどこの一週間、シュエラは滞在したクリフォード公爵邸で、毎日入浴して体をすみずみで
洗われ、磨かれた。

それもすべてこの日、今宵のため。

にわかに高まってきた緊張にかちこちになりながら、シュエラは椅子から立ち上がり寝室へと向
かつた。

大きなベッドが置かれていてもまだたつぷり余裕のある寝室に、バスタブの台車が車輪を木の輪
留めで固定されて置かれている。その横には踏み台が置かれ、踏み台の手前には幾重にも折りた
まれた大きな布が敷かれていた。

「靴をお脱ぎになって、こちらにお乗りください」

言われた通りにその布の上に立つと、侍女たちはシュエラの衣服を脱がしにかかる。

正直、この習慣はどうにも慣れない。他人の前ではもちろんのこと、所領に移り住んだ十三歳の
頃には、母にも乳母にも肌を見せることはなくなっていた。

クリフォード公爵邸で最初に脱がされかかった時、シュエラは必死に抵抗したものだ。伯爵家ほ
どの身分のある家の娘が着替えも自分で行っていると知り、公爵家の人々はあきれ返った。

身分の高い女性は着替えも入浴も侍女に任せるものだと言えられたが、やっぱり恥ずかしいも
のは恥ずかしい。

髪飾りを外され髪をほどかれたシユエラは、踏み台を使って逃げるようにバスタブに浸かった。泡立てられた湯の中に身を沈めると、二の腕まで袖をまくった侍女たちに取り囲まれ、全身をくまなく洗われる。洗い終わるとまず最初に髪をすすがれ、立ち上がるよう言われる。立つと体の泡を流され、侍女たちに両脇を支えられて、片足ずつ洗い流してバスタブから出る。

布の上に降りると、今度は布を手にした侍女たちに寄つてたかつて体をふかれた。一人が布で髪を覆つて水分を絞っている間に、他の侍女が体をふき夜着を着せていく。一人でしていたらこうはいかないだろうという早業で、シユエラは湯冷めすることなくナイトガウンまで身につけることができた。

シユエラは化粧台の前に移動するよう促され、寢室の隅の大きな鏡の前に座る。侍女が二人がかりで髪を布に挟んでほんぽんと叩く。その間に他の侍女たちがバスタブを寢室の外へ運び出し、入浴に使つたものをてきばきと片付けていく。

髪がわずかに湿り気を残す程度に乾いた頃、腰まである髪に油をなじませられ、歯の粗い櫛で丁寧にすかれた。

それからシユエラは、ベッドに入るよう言われ、横たわるとなめらかな肌触りのシーツに包まれた毛布をかけられる。

侍女たちはベッドの横に一列に並び、同時に頭を下げた。

「それではおやすみなさいませ」

「あ、はい……おやすみなさい」

シユエラがもごもごつぶやいた言葉など、侍女は誰も聞いていないだろう。順番に出て行き、ぱたんと扉が閉められる。

寢室は、先ほどまでの忙しさが嘘のように静まり返った。

静寂は人を思考の檻に閉じ込める。

侍女たちに振り回されるように世話をされ、いつときは忘れることができた緊張がふたたび頭をもたげてきた。

新妻の心得は知っている。

夫を肅々と迎え、あとは夫に任せること。——つてぜんぜん参考にならない！

新婚初夜がどういふものなのかわからないのに、心構えもへつたくれもない。どうして誰もこんな大事なことを教えてくれないのか。

シユエラは頭をかきむしりたい衝動に駆られた。が、すんでのところで我慢する。せっかくつやが出るまでくしけずつてもらつたのに、乱してしまつてはもつたいない。

手入れが行き届いたおかげか、所領にいた頃は縮れてまとまりが悪かつた栗色の髪は、細かなウエーブがかかつた美しい髪へと変貌を遂げていた。髪が見違えたようになったのは、公爵の邸に滞在して三日目のこと。「どんな魔法を使ったの？」と聞いて、その場にいた人全員に笑われた。

コンプレックスだつた髪は今では、自分の容姿の中で一番好きだつた水色の瞳よりお気に入りだ。陛下はこの髪を気に入つてくださるかしら？

シュエラは体を起こし、隣の部屋に続く扉をじっと見つめた。

国王はこの扉から入ってくる。しかしいくら待っても扉は開かれない。静まり返ったまま、隣の部屋に誰かが訪れた様子もない。

お忙しいのかしら？

シュエラは起き上がり、ベッドの端に腰掛けて、気持ちを落ち着けるために深呼吸した。夜は長い。今から気を張り詰めていては保たない。

繰り返すうちに、少しずつ強張っていた肩から力が抜けていく。

ガチャ、という扉の開いた音でシュエラは目を覚ました。

はっとして起き上がる。たった今までくるまっていた毛布が、体からずり落ちた。

「あ……れ？」

寝室に入ってきたのは侍女たちだった。

「おはようございます」

扉の前に並んで行儀よくあいさつした侍女たちは、寝室のあちこちに散っていく。

分厚いカーテンが柱の陰にまとめられると、窓ガラスの向こうから透き通るような日の光が差し込んできた。

朝？

いつの間にか眠ってしまったらしい。シュエラは呆然とする。

まさか、国王はシュエラが眠りかけていたので怒って帰ってしまったのだろうか。

テーブルの上に洗顔の準備を整えた侍女が、シュエラに軽く頭を下げた。

そのしぐさに促されて、シュエラは慌ててベッドを降りる。ベッドの脇で待ちかまえていた侍女がガウンを着せかけてくれ、シュエラはテーブルの上に置かれた洗面器の前に立った。

冷たい水で顔を洗い終えると、ちょうどいいタイミングで侍女が顔をふくための布を差し出してくる。

お世話はきちんとしてくれるのよね……

でも打ち解けようという様子が、彼女たちにはまるでない。

昨日に引き続き居心地の悪さを感じながら、シュエラは促されてベッドの近くに戻る。ベッドの上には着替えが並べられていて、ガウンと夜着を脱がされたシュエラは、下着から順に着せられていく。

足を上げてください、腕を上げてください、と言われるままに体を動かしながら、シュエラは考え事をしていた。

今は侍女たちのことより、国王のことが気になる。

とはいえ、今更焦っても仕方ない。

シュエラが眠りかけていたことで国王を怒らせたのなら、ケヴィンが何か言ってくるはずだ。

クリフォード公爵の子息であるケヴィンは、シュエラに愛妾になることを持ちかけた人物だ。後見は身分が高い方がいいだろうからと公爵が引き受けてくれていたが、実質的な世話はケヴィンが行っている。

ケヴィンは国王の側近で、シュエラの幼馴染であるエイドリアンを、先の戦争中に王族を守る楯とするためにのみ結成された親衛隊から、常時王族を守る近衛隊このえたいに推薦してくれたのだという。そうしたつながりからケヴィンはシュエラのことを知り、王都から馬で往復十日以上かかるハーネツト伯爵領にわざわざ出向いて、愛妾あいしやうの件を要請した。

最初の印象は誠実そうでいい人だったけど、公爵邸で世話をしてくれていた時の彼の口癖は、「あなたには本当に伯爵令嬢なのですか？」だった。

シュエラはケヴィンから見ても、貴族としてあまりに不適格だったらしい。会えば必ずくどくどくどくどと説教する。

「……」

すつごい不機嫌な様子でたつぷり嫌味言われるかも……

今からげんなりしてくる。

着替えが済んで応接室に行くと、すでに朝食が並べられていた。

シュエラは朝食から目をそらし、こみあげてくるものをうつつと呑み下す。

昨日と変わらずぎつしりと詰められたパンのかご。大きなボウルにたつぷり盛られたサラダ。ワゴンにはやはりいくつもの容器が積まれている。

昨日の申し出は聞き入れられなかったようだ。

完食するのをあきらめることにして、テーブルに着いたシュエラはサラダと果物を少量取り分け

てもらい、それと紅茶だけで食事を済ませた。

昨日もそうだけど、侍女たちは大量に食事を残してもとがめる様子がない。食べ過ぎをまぎらわせようと体を反らしただけで眉をひそめたのに。

もしかして王城では、大量に食事を残すのは当たり前のこと？

なんといいもつたない習慣だ。これを聞いたら弟たちは目をむいて「余ってるならオレにくれ！」と叫ぶに違いない。

弟たちのことを思い出して口元をほころばせると、侍女の一人が奇異きいの目をシュエラに向けた。

朝食が終わると、シュエラは放置された。

食事の載ったワゴンと一緒に四人の侍女が退室し、残った侍女二人が扉のわきに立ってすましている。

「あの……」

「何でございましょう？」

やった！ 返事あった！

シュエラはこの機会を逃すまいと、意気込んで聞く。

「あなたたちのお名前は何というの？」

侍女は驚いたように目を見開いたが、すぐに取り繕ってつんとした。

「必要のないことと存じます。ご用の際は側にいる者にお申しつけくださいませ」

名指しで用事を言いつけてくれるな、という意味だろうか。

「あの……そうではなくてね？ お互い名前を知っていた方が、気心が知れるというか……」

「そのような必要はございません」

ぴしゃつと言いつけると、これ以上何も言うことはないとはばかりに口元を引き締める。もう一人の侍女も、拒絶するように決してシュエラの方を見ようとはしない。

仲良くなることをあきらめ、シュエラは尋ねてみた。

「これだけは教えてほしいのだけど、わたくしはこれからどうしたらいいのかしら？」

二人の侍女は互いを肘で突き合った。それが二、三度繰り返されたのち、先ほど答えてくれた方じゃない侍女が口を開く。

「お好きになさればよろしいかと存じます」

「お好きになって……」

昨日来たばかりで右も左もわからないシュエラが、何をどう好きにできるというのか。侍女たちはつんとあごを上げて、シュエラを無視する態度を取る。

不快に思われてしまうのは仕方ないにしても、この拒絶のされようは一体何なのだろう。愛妾——愛人だからというだけじゃないような気がする。

けれど理由を考えたところで、昨日初めて王城に上がったばかりのシュエラにわかるわけがない。困窮生活で何事も惜しむ性格が身についているシュエラは、時間の無駄と割り切つて疑問を頭の隅に押しやった。

すつくと椅子から立ち上がる。

「散歩に行つてくるわ」

そのままの格好で廊下に続く扉に向かうシュエラを、侍女たちは声をかけて引き止める。

「お待ちください！ ただいま着替えを用意いたします」

あ、そうだった。

一日中同じ服を着て過ごす生活をずっと送っていたから忘れてしまいがちだけど、貴族は外に出るにも着替え直さなくてはならないんだった。

「お、お願いね」

貴族らしくない行動をごまかすために作り笑いを侍女たちに向けると、二人そろつて奇妙なものを見る目をして、「かしこまりました」と頭を下げた。

部屋着よりもリボンやレースなど装飾の多い外出用のドレスに着替えたシュエラは、侍女一人に付き添われて部屋の外に出た。階段室に向かつて廊下を歩く。

西館の二階に部屋をもらっているシュエラは、美しい造りの階段を降りた。

一階に着くと、階段正面の開いた扉から庭の一部が見える。そこに植えられた花々の色鮮やかさに誘われて、シュエラはまっすぐ外に向かった。

扉の両脇に、灰色の制服を着た衛兵が立っている。

シュエラは二人に声をかけた。

「ごころうさまです」

ぎよっとして身をひきかける衛兵たちの間を、何でおびえるんだろうと首をかしげながら通り過ぎる。

扉の先は広い広い庭園だった。

「うわあ……！」

シユエラは思わず感嘆の声を上げる。

薔薇の生け垣、花に埋め尽くされた花壇が、見渡す限り広がっている。石畳の道を歩きながら、シユエラはまるで夢の世界にいるようだと思った。公爵邸にも美しく整えられた庭があったけど、ここはその何倍もの広さがある。

維持するのにどれくらい費用がかかっているのかしら？

庭の美しさに感動する感性を持ち合わせていながら、シユエラの思考の行きつく先はそこだった。つばの広い帽子をかぶった庭師たちが、庭のあちこちで作業をしている。話が聞けないかなと一番近い庭師のもとへ歩いていこうとしたところで、後ろから声をかけられた。

「シユエラ嬢……」

シユエラはぎくつと立ち止まり、おそるおそる振り返る。

いつの間にかケヴィンが側に来ていた。

ブルネットの髪に深い紺色をした瞳、目鼻立ちのくつきりした、りりしい顔立ちをした長身の男性。その彼が怒ったような顔をしているのに気付いて、シユエラは首をすくめた。

「あなたという人は朝っぱらからうるちよると……おとなしくしているということができないんですか？」

「……すみません」

だって貧乏性なんだもの。じっとしてるなんてできない。——という言葉は呑み込んでおく。

ケヴィンは横を向いて大きく息を吐き、もう一度シユエラの方を見た。

「今日はあなたにお小言を言いにきたんじゃないんです」

「え？ 昨夜のことじゃあ……」

「昨夜のこと」とは何ですか？ わたしの知らないところで何かやらかしたのでですか？」

眉間にしわを寄せるケヴィンに、シユエラは両手の指先をこねくり回しながらぼそぼそと答えた。

「昨夜陛下がいらつしやらないうちに、わたくし眠りこけてしまっ……」

「何を言ってるのです？ 陛下が夜にあなたの部屋を訪れるわけがないじゃないですか」

「は？ あの、でも、わたし、愛妾あいしやうになっ……」

国王からお呼びがかからなかったのだから、向こうがシユエラのもとを訪れるものだとばかり思っていたのだけだ。

顔をしかめたケヴィンは、腰に手を当ててシユエラを見下ろした。

「わたくし」と言いなさる

シユエラはあつと口を押さえる。所領で街の人と話していた時の癖がまだ抜けず、たまにうっかり「わたし」と言ってしまう。

ケヴィンはあきれ顔でため息をついた。

「結婚という制度で成立する夫婦とは違い、愛妾は『愛妾になる』と宣言しただけでは成立しないのです」

そんな話聞いてない！

驚きに目を見開くシュエラに、ケヴィンは追い打ちをかけた。

「あなたには愛妾になる努力をしていただかなければなりません」

3 初めてのお茶会

「は？」

愛妾になる努力？ 何それ。

「……口を閉じなさい」

苦虫をかみつぶしたような顔をしたケヴィンは、「部屋に戻って話しましょう」と言っ、きびすを返して歩き出した。シュエラはそのあとに続く。

部屋に戻ると、ケヴィンは椅子を引いてシュエラに座るよう促した。座ると、ケヴィンはもう一つの椅子に座る。

テーブルを挟んで差し向かいになったケヴィンは、身を乗り出すようにして質問した。

「シュエラ嬢、あなたは愛妾とは何なのか、どこまで理解していますか？」

「ええつと……お世継ぎをもうけるために、王妃さま以外に陛下のお側に上がる女性だと……」

シュエラは頬を赤らめる。何てことを言わせるのか。悪い人ではないと思うのだけれど、どうもデリカシーに欠ける。

羞恥に頬をそめるシュエラを気にした様子もなく、ケヴィンは話し始めた。

「そうです。我が国は、一人の男性が複数の女性を妻に迎えることを認めています。ですが国王陛下にお世継ぎが生まれなければ国の一大事。そのため愛妾を置くことが古くから慣例的に認められています。早い段階から国王陛下には愛妾を持つことが推奨されてきました。しかしどなたも陛下の御心を射止めることができなかつたのです」

シュエラはおそろおそろ手を挙げた。

「あの……お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「何です？」

「今までどんな方たちが愛妾候補としてあがったんですか？」

「類稀な美貌の持ち主から未亡人まで、さまざまな女性がいらっしやいました」

「……何人ほどの方が？」

「二十七人です」

はつきりと告げられた人数に、シユエラは仰天してのけぞる。そんな不作法にわずかに眉をひそめながら、ケヴィンはとどめをさした。

「あなたにはこれから、陛下に気に入られるよう努力していただきます。城に滞在を許可された期間は一カ月、その間に陛下の御心を射止めてください」

「そんなの無理です！」

シユエラは椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。

「美人や結婚経験のある方たちができなかったことを、み、見栄えのする顔でもなく恋愛経験さえないわたしに、できるわけないじゃないですか！」

「安心していいです。陛下の好みの基準は、多分そんなところにはありません」

恥を忍んで告白した事実を、ケヴィンはさりげなく聞き流す。シユエラは勢い込んで尋ねた。

「じゃあどこにあるっていうんですか!？」

「それがわからないから、我々陛下は苦勞しています」

本当に苦勞していそうな様子で洗面になるケヴィンに、シユエラはまたあんぐり口を開けた。

いちいち注意することに疲れたらしい。ケヴィンは小さくため息をついて、シユエラのだらしない顔から目をそらす。

「お会いできないのに陛下の御心を射止めるのは難しいでしょう。ですから陛下をお茶の席に招待します。今日の午後に約束を取り付けました」

「だからそんなの」

無理、と続けようとした言葉を、言葉で遮られる。

「いったん差上げた援助金を返せとは申しませんが、あなたが愛妾になれなければもちろん援助金は打ち切ります」

シユエラはぐつと喉を詰まらせた。何だか「愛妾になる努力をしないなら、もらった援助金も返すのが筋だね」と言外に告げられているようなプレッシャーを感じる。

今さら返すことなんてできない。最初にもらった援助金は所領の整備のためにとづくに使ってしまった。

他にも城に上がるために、ドレスをたくさん仕立ててもらった。その上、公爵邸に滞在した費用まで上乘せされたら、どのくらいの額になるのか恐ろしくて想像もできない。

黙り込んだシユエラに、ケヴィンは席を立ちながら言った。

「お茶の時間までに、どうかして陛下に気に入っていただける方法を考えてください」

呼び止めて何か聞かなぎやと思うのに、何をどう質問したらいいのか見当もつかない。

シユエラがぐるぐる考えているうちに、ケヴィンは侍女に二、三指小を出して部屋を出て行った。

愛妾になるための努力なんて、恋愛経験のないシユエラがいくら考えたところで思いつけるものではない。

昼食が終わり片付けが済むと、応接室に一人だけ残って他の侍女は寢室に入っていく。しばらく

したところで一人出てきて、軽く頭を下げた。

「お着替えの準備が整いました」

ケヴィンが指示していったことだ。

寢室に入るとベッドの上に薄紅色の正装が広げられていた。シュエラは部屋着を脱がされ、侍女たちに囲まれて衣裳を身につけていった。

そう、散歩から部屋に戻りケヴィンが退室したあと、外出着からまた部屋着に着替えさせられているのだ。これが本日四度目の着替え。貴族の生活ってめんどくさい、とシュエラはつくづく思う。コルセットで胸をぎゅうぎゅうに絞られ、鬘たつぷりのペチコートを穿かされる。肩口のふくらんだ上衣に袖を通して、背面を紐で閉じられてから、上衣の下にスカートが取り付けられた。

ペチコートがスカートを押し上げ、すそがふんわりと丸く広がる。

お茶の席つてことは、きつと椅子に座らなくちゃいけないわよね……

正装での着席の仕方は公爵邸で習ってきたが、初めての本番ということで慎重に手順を指折り数える。その様子を侍女の一人が白けた目で見ていた。

「化粧台の前にお座りください」

思わぬところで予行演習。座る際はこそごとと落ち着きないしぐさをしてはならない。あくまで優雅に気品高く。

目の前に大きな鏡があるおかげで、自分の動きをチェックできた。ちょっと気取った感じになっただけ、まあまあうまくできたと思う。満足げに唇の端を持ち上げると、鏡に映った侍女の一人が

それに気付いたらしく、気味悪そうに表情をゆがめた。
侍女が二人がかりで髪をすき、それから一人が中心になってシュエラの髪を結び上げていく。シュエラの背中を覆うたつぷりの髪のほとんどが頭の後ろにまとめ上げられ、そこからおくれ毛のように幾筋かの毛先が背中に流される。寶石がちりばめられた手のひらほどもある銀の髪飾りを差し込まれて、シュエラの頭はいよいよ重たくなった。

お茶会が終わるまで耐えられるかしら……
その後薄く化粧をほどこされ、着替えがすべて終わったのは二時を少し回ったくらいの時間だった。

まだ早い時間なのに、シュエラは侍女たちに促され、応接室で椅子に座って待たされた。柱時計は二時十二分、お茶にするにはまだ早い。

胸はぎゅうぎゅう、頭はぐらぐら。こんな状態で三時のお茶の時間まで過ごさなくてはならないなんて拷問に等しい。謁見の際の不自然なポーズといい、高貴な人間は拷問が好きなんじゃないかと疑ってしまう。

しかもすでにお茶の準備は万全に整えられ、侍女たちがずらりと並んで控えているものだから、暇つぶしをするのもちろんのこと、重い頭を支えるためにソファに沈み込むこともためらわれる。そんな状態でじりじりと時間は過ぎていった。

二時五十分、二時五十五分、二時五十八分……

もうすぐお茶会が始まる。お茶会が終わればこの格好をすぐ解くことができる。

それだけを励みに我慢し続けたのに、三時を回っても国王は訪れない。

お茶を淹れるためのお湯は、三回運び直された。

侍女たちも焦れてきたのか、もじもじと動いたり、隣同士目配せで何か伝え合ったりしている。

国王が訪れたのは、もう少しで四時を回るといふ頃だった。

廊下の方から何やら聞こえてきて、それが次第に大きくなってくる。

ようやく来たかとほっとして、シュエラは迎えるために椅子を立てて扉の方を向いた。

人の声や足音が部屋の前までやってきたかと思うと、ノックもなしに勢いよく扉が開かれる。

扉を大きく開け放つのは、ラウシュリッツ王国国王シグルド。

おじぎをしなくてはならないのに、シュエラはうつかり忘れて見入ってしまった。

ああ、この瞳……

謁見の間でシュエラを見下ろしてきた、鋭利な、憎しみすら感じる群青色の目。

「シュエラ嬢……」

ため息まじりのケヴィンの声に、シュエラは我に返った。

あ、おじぎおじぎ。

シュエラは慌ててドレスのスカートをつまみ、腰を低くして頭を下げる。

扉を開けたところで一旦立ち止まっていた国王シグルドは、腰に提げた剣を外しながら大股に歩いてきて、外した剣をケヴィンに預けると、椅子を乱暴に引きどかすと腰を下ろした。

うわ〜すつごい不機嫌。

ここからどうしたらいいものかとケヴィンにちらりと視線を向けると、ケヴィンは渋々といった顔をしてあごをしゃくろ。座れという意味だろう。シュエラはスカートが不恰好にならないよう、細心の注意を払って腰かけた。

二人の侍女がお茶の支度を始める。茶葉の入られたティーポットにお湯が注がれ、カップはお湯で温められる。

お茶が淹れられている間、シグルドは腕組みをして背もたれに体を預け、目を閉じていた。

毛先の少しはねた金茶の髪、きりつとした眉。通った鼻筋。血の気の薄い唇。すつきりしすぎの頬からは、幾分やつれた印象を受ける。

それでも群青の瞳が開かれると、野性味を帯びた力強い顔立ちになる。

今日は細い冠をつけているだけで、重いマントもなく、金系銀系で装飾された華美な衣装でもなかった。ケヴィンともう一人のお付きの人と同じような、上質そうだけど無駄な装飾のない衣服だった。

カップの湯がワゴンの下の段の瓶に捨てられ、蒸らし終えた紅茶が注がれる。

ティーソーサーに載せられたティーカップが、何も入れられないままシグルドの前に置かれた。

シュエラは思わず口を開く。

「あの、お砂糖は……」

シグルドの背後に控えていたケヴィンが、すつと近付いてきてシュエラに耳打ちした。

「陛下は甘いものがお嫌いでしたっしやいます」

シユエラの後ろまでワゴンを押してきた侍女が、シユエラに声をかけた。

「どのようにいたしますか？」

「あ……わたくしもそのままで」

少し考えつつシユエラは答える。何も入れられない、淹れたての紅茶が目の前に置かれた。

シユエラの前にお茶が置かれる前から、シグルドはさっさと紅茶に口をつけていた。シユエラも口に運ぶが、熱すぎて少しずつしか飲めない。シグルドも同じらしく、顔をしかめながらせつせとすする。

シグルドは明らかに飲み急いでいた。

その様子をちらちらとうかがいながら、シユエラは心の中でつぶやく。

陛下が愛妾をお嫌いだなんて言っただけじゃなかったじゃない……

シグルドとはこの間の謁見が間違いなく初対面だ。なのに強烈な感情をぶつけてくるのは、シユエラ自身ではなく、立場を見ているからだと思う。

愛妾候補。

欲しくもないのに二十七人——いや、シユエラを入れて二十八人か。そんなに送りこまれては不機嫌にもなるだろう。

愛妾の存在そのものがお嫌いな方に、どうやって好かれるというの？

シグルドの後ろに戻った人物をこっそりにらみつけてやるが、ケヴィンはシユエラの視線を無視



して、話しかけると言いたげにあげを動かす。

話しかけると言われたって、不機嫌をまきちらし目も合わせようとしないうちに、何をどう話しかけるといふのか。

無理をしながら紅茶を飲み干したシグルドは、カップをソーサーに戻して立ち上がった。

「陛下、お茶の時間は終わっております。ご着席ください」

出口に向かおうときびすを返したシグルドの行く手を、ケヴィンが体でふさいで止める。

シグルドはそんなに背が低い方ではないと思うのだが、こぶし一つ分かももう少し背の高いケヴィンと並ぶとまるで成長期の兄と弟のようだった。

肩を押さえるケヴィンの手を、シグルドは腕を上げて振り払い怒鳴った。

「おまえの言う通り一緒に茶を飲んだ！ それでも不服か！」

「陛下のご休憩の時間はまだ終わっておりません」

「休憩!? 余に休憩などしている暇があるというのか!? 協力という言葉はどこに置き忘れた長官どもがのらりくらりと話をかわすせいで、どの案件も遅々として進まない！ おかげで各地から送られてくる陳情書は山のようにうだ！ おまえたちもその処理に追われて休んでいる暇などないではないか！」

「ですが、根を詰めたところで速やかに片付くというものでもありません。休憩を取ってからの方がはかどることも」

ケヴィンの説得の言葉を、シグルドは怒りを込めて遮る。

「このどこが休憩だ!? 会いたくもない女と引き合わされ、差し向かいに茶を飲まされて、まるで拷問じゃないか！」

拷問——

「ぶっ」

うっかり吹き出してしまったシユエラは、二人にらみつけられて慌てて口を押さえた。

「申し訳ありません」

何とか笑いを呑み下し、シユエラは立ち上がった。

「わたくしが陛下にお茶を淹れて差し上げますわ。それを飲んでいただけましたら、すぐにお見送り申し上げます」

ワゴンに歩み寄り、側に立っていた侍女と場所を代わってもらう。

「シユエラ嬢、あなたは何を勝手なことを」

ケヴィンにとがめられても、シユエラは全く気にせず作業を始める。

「今の陛下に休憩と言っても無意味ですわ。それよりも飲むだけで疲れが吹き飛ぶお茶の方が、きつと効果があります」

おしぼりで手をふいてから、小さなまな板の上でレモンを半分に切り、カップの中に汁を絞り出す。別のカップに、ポットに残った紅茶を半分注いだ。蒸らしすぎて濃い目になった紅茶に、はちみつをティースプーンで二杯垂らす。くるくるとかき回してはちみつを溶かすと、種が入らないようスプーンで押さえながらレモンの汁を加える。軽くかき混ぜてからティースプーンで味を確かめる

と、ソーサーに載せてシグルドに差し出した。

立ったままシュエラのことを眺めていたシグルドは、差し出されたものに眉をひそめる。

「余は甘いものが嫌いだと聞かなかったか？」

「聞きました。ですから甘くありません。どうぞお菓だと思ってお召し上がりくださいませ」

にっこりと笑いかけると、シグルドは警戒した目をシュエラに向けたまま、カップを持ち上げ一口含む。

「……飲む」

つぶやくと、カップをあおって一気に飲み干した。シグルドはソーサーの上にカップを返す。

受け取ったカップを落ちないように手で押さえ、シュエラは頭を下げた。

「それではお約束通り、お見送り申し上げます」

ケヴィンは一連のやりとりを啞然としながら見つめている。その目の前をシグルドに続いてシュエラが通り過ぎた。

シグルドは勢いよく扉を開け放ち、振り返ることなく歩き出す。

その背に頭を下げながらシュエラは言った。

「どうぞご自愛くださいませ」

シュエラの両脇を、ケヴィンともう一人のお付きの人が通り過ぎた。部屋の中からはすでに見えなくなったシグルドを、早歩きで追いかける。

顔を上げると、閉まらないように扉を押さえていたエイドリアンと目が合った。近衛隊士だから、

シグルドに付き従い護衛しながら、こうした役目も担っているのだろう。

シュエラがにっこり笑いかけると、エイドリアンは何か聞きたそうな視線をわずかにさまよわせた後、一礼して扉を閉めた。

はー、やれやれ。やっと重装備を解ける。

シュエラはカップを侍女に渡し、のろのろと寝室に向かう。侍女を待ち切れず、歩きながら両腕を上げて自分で髪飾りを外そうとしているところへ、トトトンとせわしないノックの音がした。

「わたしです」

侍女が扉を開けると、ケヴィンは侍女を押しよけるように入ってきて、シュエラにずんずん迫ってくる。

「あなたは何を考えているのですか？ せっかく陛下を説き伏せて作った機会を無駄にするような真似をして。あなたは本当に、陛下の愛妾になる気があるのですか？」

がみがみ言うケヴィンに向き直り静かに聞いていたシュエラは、顔を上げてケヴィンの黒にも見える紺色の瞳をまっすぐ見た。

「陛下に必要なのは、愛妾ではなく休息ではありませんか？」

シュエラの真剣な表情にケヴィンはわずかに目を見開く。一瞬の後、ケヴィンははあーと長いため息をついた。

「休息も確かに必要ですが、お世継ぎが必要なのも確かです。陛下には一日も早くお世継ぎが必要

なのです。愛妾あいしょうになれなければ、あなたを実家に帰します。援助金を返せとは言いませんが、あなたが着ているドレスも今つけている髪飾りも返していただきます。以前の生活に戻るのですよ？そのことをわかつているのですか？」

ケヴィンは貴族とはとても思えないシュエラの家のつましい生活を知ってるから、脅おどしになると思っているのだろう。

しかしシュエラは視線を下ろし、寂しげに笑った。

「……その時は、一時いじつかいい夢を見たと思つてあきらめます」

4 ただの紅茶の、ひみつでも何でもないヒミツ

ケヴィンには叱られたが、シュエラはシュエラができる精いっぱいのことをしたつもりだ。それでもダメならあきらめるしかない。

国王シグルドとのお茶の席があった日から三日目、昼前にケヴィンがシュエラの部屋を訪れた。侍女に出迎えられたケヴィンは、椅子から立ち上がろうとするシュエラの横に視線を落とす。

白い小さな布が畳まれ、積み上げられている。一山はただの布切れ、もう一山はレースで縁取ふちどりら

れたもの。

ケヴィンの視線に気付いてシュエラはとっさに隠そうとしたが、すでに見られてしまったものを隠しても仕方ないと思ひ直し、伸ばしかけた手を引つ込めた。

シュエラが作っているのはレースのハンカチだ。白い布をレース編みで縁取りしただけのもの。

実家で行っていた内職だ。レースのハンカチは貴族や裕福な家の娘の間で流行しつつあり、作れば作るだけ売れる。

クリフォード公爵邸でお世話になっていた時、内職をしていると正直に話して叱られた。

貴族は普通、庶民のように物を作ってお金を稼いだりしない。そうした行為は恥とみなされているけれど、日に何時間か内職をするのは、シュエラにとって身に付いてしまった習慣だった。やらないと落ち着かない。そう話してお願ひして、趣味ということ通すのならばと許された。許可をしてくれたものの、ケヴィンはいい顔をしない。今も内職しているのを見て顔をしかめた。

「陛下が先日のお茶をご所望です。午後、陛下をお迎えする準備をしてください」

「わかりました」

シュエラが答えたあと、しばしの沈黙が降りる。

他に用事がないのなら、内職の続きをしたいのだけ……

ケヴィンがいるのに内職を再開するわけにはいかないだろう。

黙つて見つめ合いつつもシュエラが焦これてきた頃、ケヴィンは彼女から視線を外し、額を押さえた。

「何か言うことはないんですか？」

「何をです？」

「陛下からお声がかかってうれいしとか驚いたとか、何も思うことがないのですか？」

「何が気に入らないのかしら？」

「いらだった口調に、シユエラは首をかしげる。」

「そうですね。私の淹れたお茶を陛下が気に入ってくださったようであれしいです」

「……秘密裏ひみつりに売買されているような、怪しい薬を入れたりしてないですよね？」

シユエラは目を見開いて顔を上げた。

「まさか！ そんな珍しい薬を手に入れるお金があったら、実家の食費に当てています」

「でしようね……」

ハンカチの山に目をやりながら、ケヴィンはため息をついた。

先日の長時間の苦痛から、国王をお迎えする際は部屋着かせて外出着にしたいと願っていると、ケヴィンは渋い顔をしながらも「外出着なら」と承諾した。

昼食後、若草色の外出着を着て、廊下へ続く扉の脇に置かれたソファに座って内職をしながら待つ。侍女たちはお茶の支度を整え、並んですましている。

三時を回ってすぐに廊下へがやがやと騒がしくなつたので、シユエラは内職の道具をまとめ、上に布をかぶせて隠した。ソファから立ち上がり、テーブルのところに移動しようとする。

けれどシユエラがお迎えする位置に着く前に、ドアノブががちゃつと音を立てた。シユエラはとつさにドアの方を向いて礼の姿勢をとる。

前回同様、勢いよく扉を開け放つた国王シグルドは、目の前で礼を取るシユエラにわずかにのけぞつた。シユエラはレディらしくつつましやかな笑みを浮かべて道をあける。

「おいでください、ありがとうございます。どうぞ」

シグルドが席に向かうのを見送つてから、シユエラも移動しワゴンの前に立った。

濃い目の紅茶を淹れ、はちみつをお茶で溶いて、絞ったばかりのレモンの汁を加える。

何故か知らないけど、侍女たちのシユエラの手元を見る視線が痛い。

「どうぞ」

出上がりはどうしてもぬるくなつてしまうそれを、シグルドはぐいっと一気に飲み干した。カップを置くと、すぐに立ち上がる。

「陛下！」

ケヴィンがいさめようと呼び掛ける。それを遮るさへぎように、シユエラは丁寧にあいさつした。

「わたくしの淹れたお茶をお召し上がりください、ありがとうございます。それではお見送り申し上げます」

ケヴィンは勢いよく振り返り、シユエラを叱り付けようとする。

「シユエラ嬢！ あなたは」

その声もシユエラは遮つた。

「わたくしは三日前に陛下とお約束したのです。わたくしの淹れたお茶をお召し上がりいただいたら、すぐにもお見送り申し上げると」

笑みを浮かべながらも強い口調で言い切ると、驚いた顔をして振り返っているシグルドにほほえんで手を差し出し、扉の方へと案内する。

ケヴィンは不承不承といった様子で押し黙り、もう一人のお付きの人と一緒にシグルドのあとに続いた。

外に出たシグルドに、シュエラは丁寧におじぎをした。

「本日はありがとうございました。どうぞご自愛くださいませ」

扉が閉まるまで、シュエラはそのまま頭を下げ続けた。

次にお茶の話が来たのは、それから二日後だった。

三度目のお茶の後、ケヴィンに聞かれる。

「あのお茶は一体何なのですか？」

「ただの紅茶ですけど？」

肩をすくめて遠慮がちにほほえむシュエラに、何をどう問えばいいのかわからなくなったらしいケヴィンは、口を開いては閉じを数度繰り返し返したところであきらめて帰っていった。

その翌日のお茶の席で、シグルドから尋ねられた。

シュエラの淹れたお茶を飲み干したあとシグルドは仏頂面ぶつどうめんで、傍らに立つシュエラに「座れ」と言った。

今日はすぐに行ってしまうのかしら？

不思議に思いながら席に着くと、シグルドは少し身を乗り出すようにして問いかけてきた。

「この紅茶は一体何なのだ？」

真剣な面持ちで尋ねてくるものだから、うつかり笑ってしまいそうになる。

口元を指の先の方で淑女らしく隠して笑いをおさめ、シュエラは聞いた。

「わたくしのお茶はそんなによく効きましたか？」

シグルドは体をひいて洗面を作り、うめくように答える。

「効いたなんてものじゃない。この紅茶を飲んでからしばらくすると、頭の中のもやが払われて執務がはかどるんだ」

背もたれに背中を預けながらうなだれ、まるで完敗したというような風情だ。内心おかしく思いながら、シュエラはにっこり笑う。

「それはようございました」

「だからこれは何だと聞いている」

むすっとしたシグルドに、これ以上はぐらかしてはダメよねと思ひ、シュエラは答えを口にした。

「ただの紅茶ですが、言うなれば風邪薬です」

「風邪薬!？」